

『ウーマン・トーキング — 私たちの選択』

監督・脚本：サラ・ポーリー

出演：ルーニー・マラー／クレア・フォイ／ジェシー・バックリー／
ベン・ウィショウ／フランシス・マクドーマンド ほか

2022年／アメリカ／105分



公式サイト

パルコユニバーサル映画
©2022 Orion Releasing LLC. All rights reserved.

社会を旅する シネマ

きつともっと 近くなる
きつともっと 知りたくなる

2010年、ある村で女性たちに不可解な事件が続いた。朝、目が覚めたら寝巻きやシーツが血だらけ。体には傷やあざができていて。記憶は皆無。男性たちは「妄想」「悪魔の仕業」などと真剣に取り合わないが、ある日、加害者が目撃され劣悪なレイプ事件だったと判明。牛用の鎮静スプレーで意識を失わせ強姦を繰り返していたのだ。警察に連行された加害者の保釈金を払うため男たちが街へ行き、村に女性のみが残る2日間で、女性たちは未来を決める話し合いをすることに。本作はその対話を描く。

原作の小説は、ボリビアのキリスト教一派の村で2005～09年に100名を超える女性が被害に遭った連続レイプ事件に着想を得ている。閉鎖的なコミュニティでの性暴力という意味では日本の某事務所とも重なる。ただ本作は特殊な集団の問題として片付けず、普遍性をさまざまな角度から見せる。

女性たちは「何もしない(赦す)」「残って闘う」「(村から)出ていく」の3択で投票を行う。票が最少だったのが「何もしない」。しかし、ひとりの女性は頑なに「赦す」ようにと訴える。「赦さないと男性に村を追われる」からだ。彼女の頬にも大きな傷跡が。女性たちは事件以前からDVなどの暴力を赦してきた。我慢して流すことしか生き延びる道を見出せなかったのだろう。だが上の世代が「赦す」と、その後の世代にまで被害が連鎖することが本作でも象徴的に描かれている。連鎖を断ち切り新しい未来へ向か

暴力の連鎖を断ち切る力 話す、聞く、考える

アーヤ藍

うためには。それこそが本作が挑むテーマだ。

映画の女性たちは読み書きを学ぶ機会を与えられず、外の世界を知る地図ももっていなかった。思考・意見することを奪われてきたのだ。話し合いで彼女たちは「聞かれてこなかった想い」を発していく。同じ苦しみを味わった女性同士でも、時に対立し、傷つけるような暴言が飛び出すことも。しかし互いに耳を傾け続け、時に諫め、反省し謝りもする。話す、聞く、考える。それをみんなで共有するプロセスが未来を変える力になると本作は強く伝える。特に、自分の心ない言葉や相手の選択肢を奪うような行動を反省して女性たちが交わす「ごめんなさい」が印象的だ。謝罪があってこそ赦しがあり、赦しがあってこそともに未来へ向かえる。彼女たちに一番必要なのは加害者からの謝罪だが……。

ただ、映画はあくまでも女性のみ話し合い。そして実社会ではより多くの声分散して存在する。現実のほうが「話し合い」を成立させるのは難しい。だからこそ社会の縮図のような本作のヒントを心に留めたい。

一方で女性たちが「言葉を奪う」シーンもある。一度村を追い出された男性、トランスジェンダーの若者、大人と子どもの境目にいる少年。そうしたマイノリティに女性が力を振りかざすことも。暴力の種は誰の手にもある。それを理解しているからこそ導いた彼女たちの答えを本編で観てほしい。



アーヤあい：映画探検家。1990年生。慶應義塾大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことをきっかけに、社会問題をテーマにした映画の配給宣伝を行うユニテッドピープル(株)に入社。同社取締役副社長も務める。2018年独立、映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。

